

## 今、なぜ米問題か

西頭 徳三\*

### 1. 今、なぜ米問題が重要か

今、何故米問題が重要か。この問題について話すと時間がいくらでもかかりますので、簡単にお話します。今米が問題になっている理由として、5つ考えられると思います。一つは昨年(1994)の12月、細川さんが夜中にテレビに出て、「米市場を開放する」という放送がございましたね。村山さんが「あの男はいつも夜中に騒ぐ男じゃのう」と言ったとかでマスコミを賑わしていましたが、部分市場開放で実際に米が入ってくるのは米年からです。米が入ってきますと早速影響が出てくる。これが第1点。

2番目は、米とは一体何なのだ。ミカンもあり、牛乳もあり、パンもあるけれども、米は他の農産物とどう違うのかということ。米という問題がこの2年位(1993-1994)の間に、急に意識され出した。これは何故かといいますと、昨年の不作、それから米騒動。そういうことが実際に起こりましたから、この現象をどう見るかというのが2番目です。

それから3番目は、これは立川先生が触れられなかったのですが、秋、紅葉の季節で、南予とかの農村を歩いていて若い人を見かけますか？ ほとんど見ないでしょう。歩いているのは老人ばかりです。恐らく私くらいの世代の方の記憶だと、昭和20年代あるいは30年代初め頃の農村の賑わいと言うのはそれはもう大変でした。お祭になると、みんな出て大騒ぎしていました。今、そういう風景がありますか？ ほとんど消えてしまっています。やがて高度経済成長というのが始まりまして、就職列車や集団就職で、私の中学の友達もずいぶん東京あるいは大阪に出て行きました。それから30年から35年経って、いよいよ農村にその影響というか、その「つけ」が表れたと言うのが3番目の問題。

4番目は環境問題が顕在化して、人間の生活が根底から揺らぎ始めていることです。先ほどの質問にもありましたように、問題が深刻なわりには、それを我々は身近に感じられない。だから環境問題というのですけれども、これをどう今の農業とか、お米作りとかの関わりで考えるかというのが大変重要な問題です。もはや環境を無視して、これからの農業は考えられません。

それから5番目は人口の問題です。今、世界の人口は56、7億人です。2030年頃には、100億人を突破するんです。これから毎年1億人ずつ増えて行くのです。一口に1億人と言いますと、大ざっぱに見ると、日本の人口が1億2500万人位ですから、世界に毎年日本ぐらいの国が増えて行くということですね。そういう人たちをどう養うかという問題があります。

つまり、このような5つの問題が身の回りで間接的にあるいは直接的に起きているということ、これをまず頭に入れておかないと、お米の問題は語れないということでございます。

---

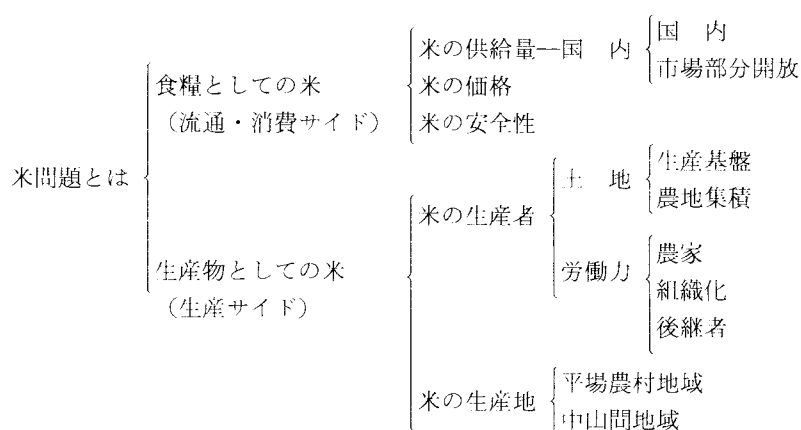
\*生物資源経営学講座 資源管理学研究室

## 2. 米問題の多様性

そこで、資料1を御覧下さい。私の考える範囲で、米問題の多様性について、いくつかの分け方をいたしました。

ひとつはお米屋さんの店先とかスーパーで並ぶ、あのきれいな袋に入ったすぐ食べられる「食糧」としてのお米です。それから、もう一つは農家を作って農協などに出荷する「生産物」としてのお米。これらは、同じじゃないかといえば、それまでの話なんですけど、一応、お米の場合には分けて考える必要がある。そして、それをトータルに見るのが米問題の正しい見方ではないかと私は思います。

そこで、この「食糧」としてのお米あるいは「生産物」としてのお米にはどういう問題があるかについては、時間がありませんのであとの話の中で触れます。一応こういう分け方ができるところを見て置いて頂きたい。



資料1 米問題の多様性

## 3. 食糧としての米問題 —流通・消費サイド—

### (1) 米の供給・価格問題

#### ① 平成米騒動の推移

まず、「食糧」としての米。今日のテーマは『今、なぜ米問題か』ということでございます。「今」というのは昔の話ではなくて、ここ2、3年から少し先の問題を話すということなんで、米問題の中でも食糧制度とか、そういうことは全部省きます。この間に、「食糧」としての米に何が起きたか、これは一応振り返る必要があります。

平成の米騒動というのは一体何だったのだろうか。これをまずいっぺん復習したいと思います。昨年の今ごろ米がどれくらい採れたんだろうか。昨年の夏は朝から晩まで一日中降っていました。今年は逆に朝から晩まで照ってましたね。昨年は今年と全く逆でした。大体、米は平年作で1000万トンですから、75%しか採れないというのは、750万トンで、250万トンが足りないわけですね。日本の国が全くどこからもお米が入らなくて、米だけで生きていたら、1億人の内、7500万人が生きられて、あと2500万人が飢え死にするという状況が昨年生じたわけです。

ごく簡単に振り返りますと、まず政府が米をタイやアメリカから輸入することを決定しました。これは新聞報道ですが、昨年の暮れの12月5日の、確か日経新聞ですが、自由米市場の「近藤」という

卸売会社の社長がこういうことを言っているのですね。「自由米市場には大体300万トンくらいの米が流れてくる。ヤミ米市場にですね。どこからくるかという、一つは農家がヤミ米として出荷するのが200万トン。ところがいったん政府に出した米のうち100万トンぐらいがヤミ米として流れる。だから、200プラス100で300万トンが自由米市場に入って来るんですが、今年はそれが非常に少ない」と。そういうことは業者ですから敏感に感じている。市場がそれを反映しまして、たちまち価格が上がりました。普通一俵2万門くらいでしか出荷してない自由米・ヤミ米が3万5000円になり、さらに上がり始めました。新潟産のコシヒカリが4万門から6万門ですよ。それはもう大変な値上がりです。こういうのを受けまして、消費者は色めき立つと言うのか、どうなるんだろうと思い始めたわけです。

ちょうどその頃、2月28日に参議院の共産党の女性議員が質問をしまして、輸入米の中にネズミが入っていたということを行ったんですね。それが報道されて、これは大変だと、主婦の方が米集めに廻る、農林大臣や食糧庁長官が、国産米ばかりを食ってばかりじゃ困る、足りないんだから、もうブレンドしますよという『ブレンド発言』がありましたね。コーヒーのブレンドというのはいいんですが、米のブレンドというのはいいと猛反発が起きました。直ちに今度は「セット販売をする」ということになりました。それが3月11日で、それからどんどん自由米が上がりました。3月23日頃には5万5000門程度まで値上がりし、大体天井感だという報道がされていました。

私も実際、家に帰れば消費者でございますので、いわゆるセットのタイ米をずっと食べておりました、国産米を食べておりませんでした。やはり、一番困ったのは外食産業ですね。外食産業というのは、お米を食べさせて商売をしているわけですから、ブレンドされた米では、お客に嫌われるわけです。だから「セット販売」にしてくれなんて言うわけですね。それでも業者は「量」だけは手当をしていたようで、消費者みたいなことはなかったようですが、混米には大変困ったらしいですね。そして、3月末になりますと、こういう問題はだいぶ解消されました。食糧庁長官が、記者会見で、我々の輸入米の手当が非常に遅かった、と半分反省をしていたというのが出ておりました。この頃から、米の値下がりというか、そんなにむちゃくちゃにはならないだろうというのが大方の見方になりました。

この時期に、国産米750万トンの内、400万トンぐらいを政府が集荷しているわけですね。そうしますと、残りの350万トン、これがまだ農家に残っている。ですから、政府は3月25日に農家に残っているお米と、政府手持ちの米、そして輸入米を合わせて、『今後の需給計画』を発表しています。昨年採れた米が766万トンだから、大体175万トンから215万トンを輸入し、必要総供給量の990万トンから1010万トンを賄いましょうという計画です。大ざっぱに言いますと、約800万トンの米では足りないので200万トンを輸入して、国民に1000万トン供給しようという計画をたてているのですね。

そこで、問題になるのは3月から6月までどういう配給をするかです。4ヶ月で大体200万トン供給する必要があるわけですね。農家の保有米は別ですよ。その内訳は国産米を60万トン、プラス輸入米を140万トンです。この比率は30%と70%です。1ヶ月でいいますと約50万トンの配給の内、15万トンは国産米だけど、あとの35万トンは輸入米です。ここでタイ米が嫌われるという状況が生じたわけです。

そのあとのことを簡単に申します。早場米が出て、大阪の生協が130トンを購入したという4月の中頃になりますと、自由米が下がり始めました。と同時に、いわゆる『食糧管理法』はどうもぼっとせんなあとということで、『食糧法』を見直せとか、あるいは30年前の『農業基本法』を見直せとか、農政審議会がいろんなことを言い出しました。さらに話をポンと飛ばしますと、細川内閣が出来て、いわゆる市場開放に向けて6兆から7兆門を農業につぎ込むんだと言う話をしました。そして今日

(1994年11月7日)、新食糧法という食糧法に替わるものを国会に提出するというのがNHKのニュースにありました。これが平成の米騒動の極おおざっぱにみた流れです。これにはいろいろな立場で関わられたと思いますから、思い出して頂きたい。

## ② 平成米騒動の原因と教訓

そこで、平成の米騒動というのは一体何が原因だったのか。これはやはり情報不足が一番大きいだろうと思います。食糧庁長官が言っている通りです。情報が入らない。もう一つは、消費者が情報の入らないことに対して苛立って、買い急いだということ。全国にお米屋さんが1万2000店くらいあるそうですが、それぞれが顧客を持っていますし、他の方は別としても、いつもお米を買ってくれる人にはなんとか安定してお米をあげたいと思いますから、こういう小売店が足りない分をいわゆる自由米市場に求めたのですね。そうすると当然これは値上がりになりますね。

さらにもう一つは政府の対応の悪さです。これまでずっと米が余っていました。昭和43年、米が生産過剰になり、それから減反政策、転作というものが行われて今日までできています。これは消費者の方であまり農業をご存知でない方には、分かりにくいと思いますが、これで農家は難儀しているんです。いい田圃を持っていても、お米は作ってはいけませんよ。野菜を作りなさい、大豆を作りなさい、麦を作りなさい、と。それは無理な話です。何故ならば、お米を作る水田は水を張る装置なんです。そこに、畑作物である麦を作れ、野菜を作れといってもよく出来ますか。出来ませんよ。農家はそれを引き受けてかなり苦勞をしているのです。この話はまたあとでしますので、この辺りでとどめておきます。こういうことに慣れて、農林水産省は、あんまり備蓄することもないだろう、過剰米が出て大蔵省と喧嘩するのも大変だということもあったと思います。

ところが不作という予想もしないことが突然出てきた。

それから急いで輸入したのが、この4番目の問題になります。輸入なんて簡単にいいますが、どっかそこらにあるものを持ってくるのとは違います。日本が急いでアメリカにお米を輸出してくれと頼みに行った時にはもうアメリカは輸出先が決まっています、日本に売るお米がない。そこで、中国にあるから売って下さいよと言ったら、中国は先ほど立川先生の話にもありましたように、いま発展途上です。お米があっても、港までそんなに簡単に運べない。港も整備されていない。要するに、輸入の決断が遅れた上に、決断したからと言ってすぐに入るものではないということが実証されたわけですね。

そこで、こういうことから我々は一体何を学んだのかということをお次にまとめておきます。それは基本的には、国民一般が分かりきっていたことが分かっていなかったということ。それは何かと言いますと、第1にお米はやっぱり農産物なんだなあとということですね。しかも日本の場合は主食だということですね。第2は、農産物であるということから、天候に支配されるということ、だから生産は急には増えず、安定した供給が不可能だということですね。

もう一つはパンもありいろんな食物があるから、安心だというけれども、やはり、生きるためには食糧の中で一番大切な物は、純粋に日本で作り自給出来るのは米だと認識したということです。日頃口に出して言わなくても、米に対して、皆さんがそういう位置づけをして、結局そのような行動に走ったのが、このあいだの平成の米騒動であつたらうと私は考えております。これは、私だけではなくて、国民一般が大体そういうことを考えているのですね。

これも時間がございませんので、簡単にいいます。「食生活と農村の役割に関する世論調査」というものがあります。昨年の11月、全国の3000人に面接調査をした結果が出ております。食糧の供給について将来どうなるかという質問に対して、「ある程度不安だ」とかんじているのは53.9%、「非常に心

配だ」というのが17%ですから、合わせると7割の人が不安に感じているのですね。「全然不安じゃない」というのが4人に1人にならない。その理由として、やっぱり「異常気象か災害の発生」を6割から7割の方があげています。これに対して、「外国の安い農産物を輸入したほうが良い」というのは非常に少ない。これが先ほどの私の結論の理由でもあるわけなんです。おそらく、大なり小なりみんなこう考えていると思います。この頃の子供は、パンが好きだと言われますが、私の子供に、「そんなにパンが好きなら朝から晩までパンを食べたらどうだ」と言ったら、「飽きる」というんです。ときどき食べるから美味しいんだという。全くお米無しで生活している子供さんもいることはいるのしょうけれども、まあ、これが大体平均的にはそうではないかと私は見ているわけです。そういうことがこの調査に現れているのかなあとと思います。

敗戦直後の昭和20年はお米の不作の年で、極端に言うとも半分くらいしか採れなかった。それで、米騒動・食糧メーデーというのが起きたのです。それは一つには海外から300万人くらいの方が引き揚げてきたということもありますが、やはり米の不作が大きな原因でした。それから大体10年間、お米が不作で食糧不足だったんですが、昭和29、30年にお米と世界的な麦の豊作がありまして、そこで食糧需給関係がいっぺんにひっくり返る。そして昭和30年代になって、「もはや戦後ではない」というあの有名な経済白書が出てくるわけですね。これからの日本農業は競争力をつけるんだということで『農業基本法』が出て来た。

ですからある意味では、昭和30年頃からずっと今日まで、日本人はあんまり食糧のことを心配しなかったというのも事実です。それがこのあいだ食糧不足を実体験した。しかも、輸入米というものがどういうものかということも体験した。タイ米は食えないがカリフォルニア米は結構食えるじゃないかという評価が出た。

同時に、お米とか食糧というものをどう考えたらいいかということが一般消費者の中に芽生えてきたのではないかと、ということ。以上が平成の米騒動の原因、教訓でございます。

## (2) 米をめぐる供給・価格問題の実態認識

では、これからどうするか。先ほども展望がないと言う質問がありましたが、まさに、我々展望のない時代に立っております。そこでやはり、農業問題に対しては政府でもそうなんですが、長期的に考えてもらわなくてはならないということが一つあります。もう一つは、今日、明日をどうするんだという短期的な問題を考えて行かなくてはいけない。

短期的な視点としては1年から5年位をひとつの期間とした場合、はっきりしていることが一つあります。米市場の部分開放で来年から、38万トンの米が入ります。これは公開講座ですから、少し理屈っぽい話であってもいいと思います。中学校の教科書にこういう供給曲線と需要曲線がよく書かれています。ヨコ軸が生産量と消費量、タテに価格をとります。ちなみに、農産物の価格が上がりますと、農家は儲かるかも知れないということで、お米をどんどん作るわけです。生産が増加すれば食糧の供給は増えます。これを示したものが供給曲線です。逆に消費者というのは、値段が上がると買う人がだんだん減ります。反対に値段が下がると買う人が増えます。現実にはこんな単純には話は出来ないんですが、ものごとの理屈として、両者の交渉の結果として売買が行われる。その結果がこの交点なのでですね。この値段で商取引をする。だから、供給量もこれだけ、需要量もこれだけということで価格が決定して、売れ残りも出ないし、足りないこともない。つまり生産と消費を左右しているのが価格です。

ところが、こういうことは理屈としては分かるのですが、物によって違うのです。どう違うかというと、お米の場合は値段が下がったからと言って、急にたくさん食べられるわけではありません。自

動車だったら、1台、2台、3台、4台と買うことが出来ます。ダイヤモンドだったらもっともっと欲しくなるでしょう。ですから、お米の性格というのは、値段とはあまり関係なく、需要曲線は鋭く立っているのです。では供給曲線はどうかというと、高く売れるからといってお米を1000万トン、2000万トンと作れますか。農地面積が限られていますから、生産にも限りがあります。この供給曲線も立っているのです。二つの曲線が立っていますとどういことが起きるかといいますと、仮に供給曲線が不作で左側に移動すると、値段が急に跳ね上がるのです。これが農産物、特に必需品といわれるものの市場での性格なのです。だから、自動車とお米とを一緒に考えてもらったのでは、話がおかしくなるわけです。

私がいま一番言いたいのは、米自体あるいは農産物一般にこういう性格があるところへもってきて、来年から1000万トンの米市場に38万トン、あるいは6年後に80万トンが入る。そんなもの8%に過ぎないとおっしゃるかも知れませんが、こういうふうに曲線が動くところへ8%の供給が増えますと、どうなりますか。こんどは供給曲線が右側に行くわけですから、急速に値が下がる。こういうのを価格弾力性が低いというのです。ピンピン跳ねかえるのですね。

過去に日本ではこのような経験が何回かありました。一つは大正7年の米騒動。これは富山県の一寒村で米を求めて米屋に殴り込みをして、それがやがて全国に広がった騒動です。この時は何が原因かと言うと、シベリヤに日本軍が出兵するという「うわさ」で、米の相場がどんどん上がっていたところへ、政府がシベリヤ出兵を決定した。昔はいまのような米の管理制度がありませんから、みすみす値が上がるものをお米屋さんが売ることがない。少しでも後にしたほうが高く売れるわけです。そこへ軍需用に大量に米が買われるとなると、ますます値段が上がる。それが暴動のきっかけになったのです。ちょうどこの需要曲線が右に動いたわけですね。

それから昭和の7、8年頃、いわゆる農村恐慌の事態が続きました。これの原因の一つは東北の冷害です。米がない。東北の冷害でお米の供給量が減るわけですから、相場が上がるわけです。ところが相場が下がったのです。普通ならいつも100俵出荷していた農家が不作で半分の50俵ぐらいしか出荷できなくても、仮に米の値段が2万円から5万円に上がれば、経営として一定の収入を確保できます。ところがこの時には逆に2万円から1万円に下がったのです。何故か。それは大正の米騒動に懲りた日本政府がこれからはお米がなければ戦争を戦えないということで、当時植民地であった朝鮮とか台湾で、土地改良を進め、品種改良のために農業試験場を大々的に作り、農業生産が上がるようにしたわけです。ところが農業では、そう簡単に効果が現れない。大正の10年代位から始まった増産政策が、約10年か15年後に生産に結びついた。それが外米として日本の市場に入ってきたのです。供給曲線が左に来るはずだったのが、右に行ってしまったのです。その結果、米価がガタッと下がった。一番影響を受けたのが、お米のとれなかった東北だったのです。今でも教科書に載っていますね。「娘を売る場合は役場に相談して下さい」というある役場の案内文の写真が。まあ、そういうことで、わが国の米市場の中に、わずかかも知れないが、外国から米が入るというのは非常に難しい問題です。

先般問題になったのは、「市場の部分開放」をするのか、つまり、一定量の米を入れるのか、あるいは全部の米に関税を掛けて輸入量を約束しない「関税化」か、ということです。今でも「関税化」のほうが良かったのではないかと言う人もいます。それは分かりません。ただ、ここで申し上げたいのは、今後恒常的に米が入ってくる。そうなりますと、米の値段が下がるというのか、米が過剰になりますから、必然的に転作をしなければならぬ。そうしますと、愛媛県では平均経営面積が約60a、昔でいうと6反か7反で、今でも無理して転作しているのに、さらに転作をやりますと、農家が持ちません。農家が共倒れになる可能性がある。

それからもう一つ、これも先ほど立川先生の話にも出ましたが、いわゆる世界の米市場には、日本のお米の生産量よりわずか多い1500万トン位しか出てこないのです。しかも現在、ソ連と中国がその米の約4分の1を買っている。これから人口が増えたら、中国がもっと買いにはいるかも知れない。ロシアもああいう状態ですからもっと買うかも知れない。さらに言いますと、この市場に出てくる米の半分はアメリカとタイ国が供給しているのです。買うほうも数少なければ、売るほうも数少ない。そういう状況があります。それだから、国際的な米市場には不安定要因が非常に多いのです。これをまず頭に入れておいて下さい。

それからもう一つ、流通サイドの話です。ご存知のように、もう自由米は相当量が出廻っています。ということは、政府が管理したいと思っても、実態としては管理されていないのと同じなんです。それから、私もあまり詳しくは知らないんですが、流通マージンが高いということがある。米価の60%位が流通マージンです。買う方から言えばお米が高いと感じるのも、農家から言えばそうじゃない。彼らは4割位しか受け取っていない。ですから、お米の高い原因の6割は「流通」にあるんだということが一つ。それから、いわゆる食糧制度。今回の米騒動になかなかうまく対応できなかったわけですね。以上が平成の米騒動というのか、現在の米を巡る問題点の総括でございます。

### (3) 米の安全性の問題

さらに、安全性の問題があります。これは立川先生の領域の問題、いわゆる「残留農業」の話ですね。この間宇和島市で農家と消費者の交流会というのがありました。中立だから愛大の「西頭」出てこいといわれて、真ん中に座って、行司役をやったのです。消費者からまず出てきたのは、「あなた方は自分の食べる物には農薬をかけないけれども、売る物には農薬をかけるんですか。」という質問なんです。最初から険しいやりとりになりました。そうしたら農家が、「そんなこと言ったって、俺たちが作る野菜には絶対虫がつく」というのですね。「みんなはそれを買わんじゃないか。綺麗な葉っぱのものを買わないか。だから売るとすれば、そういうものしか作れないし、お店の方からそういうものを出してくれと言ってくる。」と。だから問題は消費者の方にあるんだという話になりました。こういう問題に対して、現在やはり、「縁故米」が多くなっていますし、同時に「特別栽培米」という制度が盛んに活用されるようになっていきます。こういう新しい動きがどんどん出ているということでここを結びたいんです。先ほど展望がないと言いましたが、お米は「量」ではなくて「質」、「安全性」、「美味しさ」が、これからの農業にとっては一つの大きな競争力になるということをここで強調しておきたいと思います。

## 4. 「生産物」としての米問題

資料2を御覧下さい。これまでは商品としての米の話でしたが、これからは「生産物」としての米は一体どう生産されているかということをお話します。農業経済学をやっている者の立場から言いますと、やはりお米の生産の問題は黒い太線で囲んだ部分に尽きるのではないかと思います。「生産物」としてのお米には3つの側面がある。1番目は『今の農村』でという問題。アメリカの農村ではありませんよ。2番目はいかに『美味しい米』を『低コスト』で作るかという問題。もう一つ重要なのはいかに『豊かな生活』を実現し、維持するかという問題。このような米は新潟へ行って作るんなら作れるかも知れない。しかし愛媛県で作らなければいかんのです。ですから、この3つの問題は1番目を農村問題、2番目を経営問題、そして3番目を経済問題というか、生活の問題の3つに分けられる。そしてこの3つの問題が同時に解決されないと「生産物」としてのお米の問題は解決しないと私は思うんです。

生産物としての	「今の農村」で	農村問題
米問題とは→	いかに「おいしい米」を「低コスト」でつくり	経営問題
(広義農業経営問題)	「豊かな生活」を実現・維持するか	経済問題

経営問題 → 米生産者問題

- |       |   |                                   |
|-------|---|-----------------------------------|
| 土地問題  | — | ①生産基盤問題 (いかに優良農地と用水を確保するか)        |
|       |   | ②農地集積問題 (いかに優良農地を集積してコストを下げるか)    |
| 労働力問題 | — | ③兼業農家問題 (兼業化の中で、いかに米生産の担い手を確保するか) |
|       |   | ④組織化問題 (集落で水利を維持管理し米生産の組織化を進めるか)  |
|       |   | ⑤後継者問題 (豊かな生活を実現し若い農業後継者を育てるか)    |

## 資料2 生産物としての米問題

そこで、とくにこの経営問題をさらに大きく分けると、土地の問題と労働力の問題の二つがあります。土地の問題を簡単に言いますと、お米の生産性を上げるために広い圃場でなくてはならない。水も十分に得られなくてはならない。と同時にその農地が米を作りたい人に集まるかどうかの問題となる。それから、労働力問題では、今、農村は兼業化していますから、米を作る人をいかに探し出して行くか、誰に任せるかという問題があります。しかし、一部の人に任せても米は作れません。大体30戸位集落に20か30haの農地があるとします。そこには溜池や河川があり、水引きの問題があります。溜池の維持管理は少数の農家でできますか。やっぱり村の衆にお世話にならなくてはいけない。これを私は組織化問題と言っています。そして、そういう問題も含めて、後継者をどう確保するかという問題もあります。

そこで、愛媛県で一番先を走っているという意味で、宇和町の事例について話しましょう。宇和町はシーボルトの娘である「おイネ」さんの出身地でもあります。宇和町はお米がとれたから「おイネ」と名付けたかどうか知りませんが、あそこは代表的な米の産地です。道後平野も広い所なんです。もう松山市が都市化してしまって、そういう条件がありません。宇和町で、私は、2つの集落、Aという集落とBという集落を見せて頂きました。そこではどういうタイプの経営が行われているかを示したのが資料3です。

そこで、Aタイプの農家はどういう経営かという、要するに、田圃はみんな、一生懸命やってくれる人に預けるタイプです。これを「個別完結型」といいます。もう一つのタイプは村の人が機械を共同で持ち、あるオペレーターに機械を使ってもらってお米を作る方法。これを「集団型」といいます。愛媛県にはこういう2つのタイプを両極にして、いろんなものがあります。

ところが、「個別完結型」には先ほどの経営問題でいいますと、自分でお米をつくる人に任せられるのはいいけれども、やはり水利の問題があったりして、新潟のように30ha、40haの農地が集まらないという問題がある。集落には兼業で米を作りたいという人もいますから、仮に量が集まったとしても農地が飛んでしまう。そうすると生産性が落ちる。これからは米の値段が下がります。今でもやっとの生活が、値段が下がれば、「個別完結型」ではなかなか良くならない。そうすると、米プラス「イチゴ」か「養鶏」という複合化の問題が生じてくる。これはこれからの愛媛県農業の一つの大きな問題だと思います。

「集団型」は一見大変いい。農家がみんな地主です。経営者です。そして、共同の機械を持って、オペレーターに仕事を任せる。このBタイプのオペレーターは、私よりちょっと若い50代前半の人で

生産要素	土地	資本(機械)	労働	経営の展開条件
A タイプ 生産要素所有者 60%規模 70%担う	地主 ↓ 利用権設定(黙2~3歳)	経営主	経営主 →水管理等 I-規模経営 II-4畝までの経営	複合化条件 (いちご、養鶏、養豚) +兼業 (経済的安定)
	地代収入	コスト高	季節的労働力余剰	
B タイプ 生産要素所有者 25%規模 100%担う	経営主 ↓ 組合員内	(共有) 00%規模利益 ↓ 組合員内	水管理等 作業依頼 オペレーター (労賃所得60円)	農家経済の 安定化条件 安定兼業 複合化 規模拡大
	高純収益	極低コスト	低コスト・短期就業	
関連問題	①と②	④	③と⑤	①と④
解決のポイント	土地所有力の存在 貸借流動化 組織をどう つくるか	コスト圧をさらに 低下するには どうするか	今後担い手・ オペレーターを どう確保する か	集落の水・ 農道のハード 整備とソフト 管理をどう するか

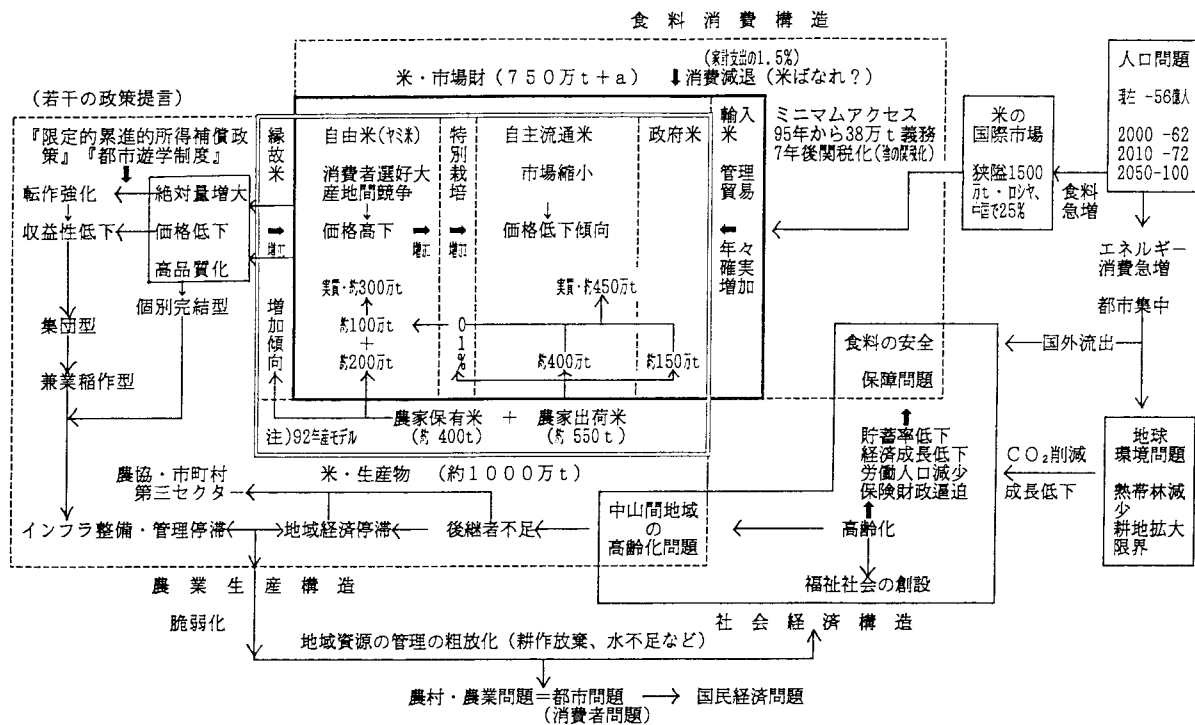
資料3 米生産問題の経営的意義と経営の展開条件

す。しかし彼は、「今、わしは昔からの行きがかり上、やっているけれども、これから先どうしたらよいか」というんです。つまり、オペレーターを確保することがBタイプの存続のカギです。何故なら、稲作労働は春先と刈り取りの10日間位に集中しており、これを1時間当たり賃金に直すと5000円か6000円位です。収入にはならないので、オペレーターは自立して生活できない。はじめの話に関わらせないと、『豊かな生活』が実現できないんです。だから、オペレーターの後継者をどう確保するかが今後の大きな課題です。

## 5. 今後の米問題

残り時間がありませんので、資料4で今までの話を一応結論づけるというか、私の独断と偏見かも知れませんが、こんなふうに考えたかどうかというのを示しました。この図の見方ですが、まず太線で囲ったところが、いわゆる市場財としての「食糧」の枠だと考えて下さい。それから2重線で囲んだところが、「生産物」としてのお米の枠です。さらに説明しますと、この2重線で囲った下の所に、農家保有米と言うのがあります。これはちなみに平年作の92年度のモデルです。農家は当初約400万トン保有している。どれくらい出荷するかというと、約550万トン。そこで、この550万トンがどのように流れて行くかと言いますと、約400万トンは自主流通米として農協に出荷されます。同時に150万トンは政府米として買い取られます。ところが、先ほども言いましたように、400万トンと150万トンを合わせた550万トンから100万トンが左側の自由米の方へ流れているのです。同時に、農家が持っている400万トンの内の200万トンが自由米の方に流れます。未検査米ですね。つまり、この200万トンと100万トンを合わせた300万トンが自由米市場に流れ込むわけですね。ですから、自主流通米、政府の

管理米は全部で550万トンですが、100万トンが自由米として流出しますから、実質的に450万トンとなります。



資料4 今後の米問題

そこに、ミニマムアクセスとしての輸入米がこの太線の市場財の枠の中に入ってきます。これは来年在が38万トンで、毎年増えて行きます、6年後には80万トンになります。しかし、この枠のキャパシティは一定です。なぜかという、日本人が食べるお米の量が約1000万トンと決まっているからです。したがって、この枠に輸入米が入ってきますと先ほどの需要曲線と供給曲線の作用から値段が上がったり下がったりするわけです。加えて、この市場財に大きな影響を及ぼすのが2重枠の左端の縁故米というやつです。タイ米は食えない、ネズミが入っていた。ピラフでは美味しいけれども毎日食えない、ということになれば、お父ちゃん送ってくれや、息子、娘可愛いやで、みんな宅急便で送るわけですね。私もあちこちから米を送ってきますけれども、相当量の縁故米があるんじゃないかと想像しています。これがあると米屋さんから米を買わなくていいということになります。

太線の枠内の影響として、自主流通米市場では価格低下傾向が必然的に現れる。市場規模は縮小せざるを得ない。ところが、自由米市場では消費者が美味しい米や安全な米を求めます。そうしますと、安全な物を出せば高く売れます。ところが、いい加減な物は安くなる。ですから、ここに消費者の選択の影響が極端に現れますから、結局、価格が乱高下する。ということは、今度は左のほうへいきますよ。これからは、農村にとってもお米の絶対量は増えてきます。何故かという、輸入米が入りますから、今の水準の量を作っても、お米の絶対量は増えます。つまり価格の低下は必至です。これはイヤだといっても仕方がない。市場のメカニズムです。市場から要求されるのは、高品質化です。

現在農村の中には、若干説明が遅れましたが、2つの構造的枠組みがあります。左下のものが農業の生産に関わる構造、右上の方が食糧の消費構造を表しています。そして、両者を結んだ所に社会経済構造と言うのがあります。これからの米問題を考える場合には「米の市場」、それから「生産物とし

ての米」、そして「食糧の消費構造」、もう一つは「生産構造」、この4つだけでは足りないと思う。あと何が足りないかと言うと、私は日本の国の経済構造を考慮にいれなくてはいかんだろうと思います。それを右下に逆L字型で示しています。さらに、一番右側に2つの要因を挙げておきました。一つは人口問題です。2000年には62億人、2050年では100億人ということです。そうすると、先ほどの米市場に対して米の国際市場に影響が現れてきます。ロシア、中国だけの問題では終わらない。これは世界人口会議があったりして、非常に重大な問題です。さらに人口が増えますとエネルギーの消費が増え、地球環境問題が出てまいります。今も出ています。ブラジルでもサミットがありました。こういう問題が出てまいりますと、やたらにガソリンを燃やすことは禁じられるようになるでしょう。そうしますと、その影響は日本の経済構造に現れます。どんな影響が表れるかといいますと、一番大きなのは経済成長率の低下です。いまでも、日本は停滞気味ですが、これにさらに「わっぱ」がかかります。高齢化で労働人口も減ります。若い者がいないということになりますと、さらにさらに生産性も落ちます。年寄りが増えると、保険財政が逼迫し、貯蓄が減ります。日本が高度経済成長をしたのは貯蓄率が高かったからです。働いて稼ぐお金の内の20%位を貯蓄していたのです。これが減りますと、投資に廻す分がなくなるから経済成長率が落ちます。

ところが、これからは食糧の安全保障が大きな問題になります。今や日本はルワンダまで行き、湾岸戦争に90億ドルも出している時代ですよ。要するにその理由は、日本だけが安穏としていいのか、お前の所だけが成長していいのか、みんなの為に出て来い、金を出せ、ということです。ですから、日本だけが食糧を高い値段で買えるかどうかという問題があります。

高齢化問題は、中山間地域で厳しい。全国で過疎地の代表というと南予が入ります。そこでは後継者不足という問題があって、先ほど言ったように、いろんな形の経営問題が農業生産構造を圧迫しています。つまり、地域経済が停滞し、農村が疲弊します。先ほど立川先生が話されたように、畑は硝酸塩が出て地下水を汚染する。ところが水田はいい装置で、塩もたまらない。こういう所で耕作放棄のために水田という生産装置が崩壊しますと、いろんな影響が出てまいります。例えば最も典型的なのは松山市の水不足です。松山市の上水は道後平野の水田の地下水涵養機能でその半分を賄われているわけですから、田圃に水の無くなるこれからは水不足が一層厳しくなると思います。

こういう問題を私の立場からいいますと、「農村・農業問題は都市問題である」ということです。これは何も東京には関係ないと思われるでしょう。しかし、東京の上流には利根川がある。大阪には淀川があり、最上流には琵琶湖があります。立川先生が、先ほど日本の河川は急流だとおっしゃったが、例えば、琵琶湖周辺に野洲川という短い急流河川があります。上流で夜中の12時に雨が降っても、その水は午前7時にはもう琵琶湖に流れ込んでいるわけです。ですから、大阪にとって琵琶湖というのは非常に重要な湖なのです。琵琶湖が急流河川の水を受け止めて、それをじっくりと近畿圏の京都市、大阪市、神戸市に供給してくれるから、大阪という都市は成り立っているのです。つまり、この問題は、日本の経済問題に関わるということです。農業はお米を作り食糧を作ると同時に、国民経済の基盤である国土にも深く関わっている。これは忘れてはならないことです。

あと1分頂いて、将来展望について話します。このような枠組みで米問題を考えると、これからの農村にはいくつかの明るい材料がある。まず、その一つは食糧問題です。今日農村に現れている状況というのは、21世紀に向けての過渡的問題であろうと思います。中長期的に農村を見る必要がある。そういう意味で、私は、農村・農業問題は消費者の問題であり、国民の問題であるといっているのです。ですから、今日ここに農業関係者だけではなくて、消費者が多数集まっていなくてはいかんです。私達もそういう所に行って話をしないといけないのです。

それからもう一つ。最後の結論になりますが、マルチメディアの問題は避けて通れないと思います。ではマルチメディアとは何か。「マルチメディアとかけて何と解く。」「UFO と解く。誰もが口に  
するが、見た者がいない。」マルチメディアはそういう意味で、コンピューターなりテレビなりの先に  
ぼんやりと見える程度のもので、ここで一番重要なことは一方的に情報が流れるのではなくて、双  
方向の通信というか、テレビを見た人が向こうに情報を発信できるシステムです。時間がないので詳  
しくは説明できませんが、私の見方では、我々の消費生活、都市生活、農村生活におけるものの考え  
方を全部変えてしまう。しかも、20年、30年先ではなくて、わずか10年位で変わると思うのです。江  
戸末期の人々が、明治維新を経験しても、明治20年頃に全く新しい電信・電話、鉄道が普及すると想  
像できたでしょうか。我々も今、第2次明治維新の時期にあって、UFO のたとえにあるようにそうい  
う世界をなかなか想像しにくいわけです。マルチメディアが社会に浸透しますと、農産物の消費形態  
も変わると同時に、農村に住みながら都市的な生活が全うできると思います。そういう意味で、今後  
の新しい社会の動きを農村の生産、生活、地域の活性化に最大限に活かす、これは最大の援軍だろ  
うと思います。ただし、具体的にお示しする事はなかなか難しい。最後に話が米問題から少し離れま  
したが、これで話を終わらせて頂きます。